

「医療」誌への参画をきっかけに！

国立病院機構西埼玉中央病院研究検査科

臨床検査技師長

奥 田 勲

昨年(平成17年)春より、国立医療学会誌「医療」の編集委員(臨床検査部門)としてお世話になっております。学会誌「医療」の存在そのものは、もちろん私を含め臨床検査技師の多くはよく知っており、日頃より学術活動における情報収集や文献検索などの有力な手段として活用しております。しかしながら、正直なところ臨床検査技師と「医療」誌のお付き合いは、今まではその程度であったと言わざるを得ません。

すなわち、われわれ臨床検査技師(検査技師に限ったことではないと思いますが……)にとって、「医療」誌はあくまでさまざまな知識・技術を吸収する場であって、自らが参加する場ではなかったのです。一言で言えば、「やや敷居が高い場所」ということになるのでしょうか。

湯浅編集委員長曰く、この度の国立病院・療養所改革(独立行政法人化)に伴い、今後の「医療」誌の在り方が編集委員会場で精力的に論議された末に、「医療職全員参加型の総合医学誌」として生まれ変わるべきとの方向性が示されたそうです。その結果として、われわれ臨床検査技師を含めた多職種に門戸が開かれることとなったようです。

臨床検査技師にとっては、まさにチャンス到来です。臨床検査領域の専門技術職として「医療」誌で仲間とともに思いきり暴れたい、と張り切ってはみるものの、孤軍奮闘、現実はなかなか思うにまかせません(「笛ふけど踊らず」とまでは言いませんが……)。

それでも、少しずつではありますが確実に変化は現れております。検査技師の会員数も着実に増加の一途をたどっていますし、1年間かけての図説シリ

ーズ(超音波検査の進め方)を検査部門で担当するなど新しい芽は育っているようです。

今、日本の医療そのものが抜本的な改革を強く迫られる状況下で、とりわけ臨床検査技師には厳しい冬の時代と言われています。そんな厳しい時代であるからこそ、われわれ臨床検査技師の医療職としての存在意義、すなわち真価(真の実力)が問われています。

目先のことだけにとらわれることなく、本質をしっかりと見据えた取り組み(意識改革)が求められているのだと思います。

ある政党の新党首が、就任会見で「変わらずに生き残るためには、変わらねばならない」と語ったのは記憶に新しいところです。また、ダーウィンはかの有名な進化論で、「環境の変化に適応したものだけが進化しうる」と述べています。今、まさにわれわれ臨床検査技師に求められる姿勢そのものと思えてなりません。今回の「医療」誌への参画は、臨床検査技師が良い意味で変わる(変わらずに生き残る)ための大きなチャンスととらえたいと考えています。与えられたチャンスを最大限に活かしつつ、近い将来、臨床検査技師から「塩田賞」を受賞するような仲間が続々と誕生することを切に願っています。